# 私と少し哲学の話でもしませんか？

へっくすん165e83

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目が覚めた貴方の身体は、人体とは似ても似つかない機械になっていました。

さて、貴方は人間ですか？　それとも機械ですか？

荒廃した世界を舞台に、私と少し哲学の話でもしませんか？

※この作品は一度匿名で投稿した作品の再投稿になります。

# 目次


機械の中の脳 ―― 1
機械語の部屋 ―― 15
テセウスの脳 ―― 26
沼に落ちた雷 ―― 36
思考する機械 ―― 46

# 機械の中の脳

一体何があったらこんなことになってしまうのだろうか。

天高くそびえ立っていたと思われる高層ビルは軒並み倒壊しており、三車線ある道路を瓦礫で埋め尽くしている。交通統制をしていたであろう信号機はちぎり捨てられたかのように道路に転がっていた。

また、道路に敷かれたアスファルトには大きなひびが入っており、所々陥没している。まるで子供が無邪気に破壊した模型のような街並みの映像を私は他人事のようにただじっと見ていた。

映像に映る空は私のよく知る青く澄んだ空とは違い目が痛くなる赤色で、浮かんでいる太陽も夕日のように赤く燃えている。赤い空には雲一つ浮いておらず、まるで赤いペンキで空を塗りつぶしたかのようだった。

私はただぼんやりとその映像を見続ける。だが、次第にその映像に違和感を感じ始めた。

本当に映像を見ているのか？

もし何かの映像を見ているなら、その映像から視線を外すことができるはずだ。私は視線を移動させようとするが、映像の中央から動かすことが出来なかった。まるで、この映像を撮っているカメラが、そのまま私の目になってしまったように。

私は視線を動かすのを諦め、首を右に回す。すると、映像も連動するように右側を映し出した。まるでこの映像を映していたカメラを右に振ったようだった。

いや、もしかしたら本当にカメラを横に振ったのかもしれない。

どういうわけかわからないが、私の眼球はカメラになってしまったようだ。

私は顔に付けられているであろうカメラを確認するために顔を手で探る。だが、顔の前まで両腕を持ち上げたときに奇妙なものが私の視界に映った。

金属製の棒を繋ぎ合わせたロボットアームのようなそれは、銀色のシリンダーが取り付けられており、私が腕を前後するのに合わせてシ

リンダーを伸び縮みさせ同じように動いている。時折アームにつけられた金属の小さなタンクが、プシュンと蒸気を吹き出した。
しばらくアームを動かして遊んでいるうちに、私はあることに気がつく。
どうやら私の腕はいつのまにかこの不細工で無骨な二本のロボットアームになってしまったようだ。
私の思い通りに動かすことはできるが、物に触っても何も感じない。数回腕を打ち合わせてみたが、金属の濁った音が響くだけだった。
もしかしたら、私の身体は今人間の形をしていないのかもしれない。
私は何か身体を映せるものを探すためにこの場を立ち去ろうとする。だがいくら足を前に出そうとしても、前に進むことはなかった。私は不思議に思い、足元を見る。
まさか足まで金属製になっているのかと思ったが、視界に入ったものは私の予想の斜め上のものだった。
四角い箱の先に細長い板が何枚も繋ぎ合わせられた帯のようなものが左右に見える。私はその金属の帯に見覚えがあった。
それは工事用の重機や戦車などに付いている履帯だった。
私の足は、重機のような履帯になっていた。
そして履帯の上にある四角い箱は、位置的に私の胴体だろう。金属製の頑丈そうな箱には蝶番が付けられており、反対側には鍵穴も見える。
まるで金庫のようだったが、金庫にしては扉に付けられているものが多い。右胸の辺りには二つのメーターが、左胸の辺りには小さな覗き窓がついており、覗き窓の中では何かが煌々と燃えている。上から覗き込むような形になっているためよく見えないが、何か細かい破片のようなものが燃えているようだった。
私はしばらく呆然と自分の身体を観察していたが、すぐに我に返る。少なくとも私は人間で、ちゃんと手足を持っていたはずだ。
一体何があってこのような身体になってしまったのだろうか。今

にも発狂して叫び出したい気分だったが、生憎この身体に声帯はついていないらしい。
私は全てを諦めて、取り敢えず周囲を探索することに決めた。幸い履帯も私の意思で動かすことが出来るらしく、思い通りに左右の履帯を別々に回すことができた。私は履帯を同時に回転させ、瓦礫を踏み潰しながらアスファルトの上を進んでいく。
これではまるでちっちゃなショベルカーだ。私の小さい時の夢は何だったか思い出せはしないが、ショベルカーではなかったはずだ。
私が一体何をしたっていうんだ。天罰にしてはあまりにも酷すぎる。
私は記憶を辿るが、バチが当たりそうなことをした記憶はない。いや、それどこか私が誰で、今まで何をして生きてきたかすら思い出すことが出来なかった。
私は瓦礫を踏み潰し、時にアームで押しのけながら荒廃した世界を進んでいく。何か身体を映せるものがないかと探していたが、ガラスというガラスは粉々に砕け、身体が映せそうな大きさのものは残っていない。
私はもう一度胴体につけられたメーターを見る。二つあるメーターにはそれぞれ表記がされており、片方には『燃料』、もう片方には『水』と書かれていた。
どうやら私は燃料と水で動いているらしい。
メーターの針はどちらも満タンに近いところを指しており、すぐに補充しなければならないということはなさそうだった。
「おや、こんなとこで会うなんて奇遇だね」
不意に横から声が掛かる。私は履帯を止めると声のした方を向いた。
そこには白いロボットが立っていた。人間を模した形をしており、身体の表面は白いプラスチックのような外装で覆われている。顔には人間と同じように二つの目と口がついており、ロボットが喋るのに合わせて開閉していた。
「レン、君も探索に出ていたんだね。っと、君の場合は捜索だったか。

もう帰りかい？」
私はじっとそのロボットを見る。ロボットは私のことをレンと呼んだ。だが私はレンという名前に全く聞き覚えがない。
私が黙って白いロボットを観察していると、白いロボットは何かに気がついたのか気まずそうな顔をした。
「ごめん、そのカイライは喋れないんだったね。私はこれから局に帰るが……よかったら一緒に帰ろう」
どうやらこのロボットには帰る場所があるらしい。全く状況が飲み込めないが、このロボットは私のことを知っているようだ。
だとしたらこのロボットについていくのが正解だろう。
私は白いロボットの背中を追いかけるように瓦礫の山を進んでいく。白いロボットは私がついてきたことを確認すると、少し歩く速度を緩めた。
「その様子だと、今日は誰も見つからなかったようだね。成果が無いのはこっちもだよ。近場は探索しきっているからあまり期待してはいなかったけど」
白いロボットは一方的に喋りながら前へ前へと進んでいく。何にしても理不尽この上ない。何故私はこのロボットのような身体じゃないんだろうか。黒電話とスマートフォンぐらいの技術の差を感じる。
「それにしても、今日は作業用のカイライなんだね。ハルの新作のテストかな？」
新作……今新作と言ったか？
どうやら目の前にいるロボットとはそもそも用途が違うようだが、それにしてもこんなガラクタが新作とは。この身体を作った者に文句の一つでも言いたい気分だった。
白いロボットは時折振り返りながら瓦礫の間を縫って進んでいく。青い道路案内標識がアスファルトに突き刺さっている十字路を右に曲がると、目の前に大きな施設が見えてきた。
あそこが目的地だろうか。
だが、その施設も周りの高層ビルと同じように倒壊している。私は

道路案内標識に視界を合わせる。その標識によれば、目の前にある施設の名前は『中央管理局』と言うらしい。
「ん？　何か気になるものでもあったかい？」
私が標識を見ていると、路地裏に入ろうとしていた白いロボットがこちらに声を掛ける。私は首を横に振ると白いロボットを追って路地裏に入り込んだ。
路地裏は思ったよりも物が少なく、瓦礫も落ちてないことからよく通られている道であることがわかる。白いロボットは路地裏の途中で立ち止まると、途中にあった扉を開けて崩れたビルの中へと入っていった。どうやら、ここが入り口らしい。
私も白いロボットに続いてビルの中に入る。ビルの中は半分崩れてはいたが、金属の棒などで補強がなされている。そして部屋の中央には、エレベーターが通っていたのであろう空間に無理矢理後付けしたと思われる工事用の昇降機があった。
私は白いロボットとともに昇降機に乗る。白いロボットが昇降機についてるレバーを下に引くと、上の方で蒸気が漏れる音が聞こえ始め昇降機は下がり始めた。
「若干蒸気が漏れているな。錆の原因になるから早急に修理しないと」
白いロボットは昇降機の上につけられた装置を見ながら言う。そうしているうちに昇降機は地面に設置し動きを止めた。降りた距離からしてそこまで地下の深いところではない。せいぜい地下に数階下りた程度だろう。私は履帯を回し、昇降機から降りる。
そこは古びた廃工場のようなところだった。壁は打ちっぱなしのコンクリートになっており、右側の壁には等間隔にシャッターが設置されている。逆に左側の壁、シャッターの対面には普通の扉が一つ設置されていた。
だが、この部屋で一際目を引くのはシャッターでも打ちっぱなしのコンクリートでもない。昇降機の真正面、まるで外から来た者を出迎えるように大きなモニターが設置されていた。
「あら、おかえり。一緒に帰ってきたのね」

モニターには女性が映っており、こちらに対し話しかけてくる。その女性は赤く長い髪を腰まで伸ばしており、それに合わせてか赤い装飾の凝ったスーツを身につけていた。
「ああ、途中で合流してね。私もレンも成果なしさ」
「あら、いつものことじゃない。今換えのカイライを用意するわ」
白いロボットが肩を竦めると、モニターに映る女性はシャッターのほうに目を向ける。それが合図かのようにいくつかあるうちのシャッターの一つが開き、中からロボットアームが伸びてきた。
私に付いているロボットアームを、そのまま大きくしたようなそれは、白いロボットの頭の後ろにあった鍵穴に鍵を差し込むと、時計回りにガチャリと回す。次の瞬間、プシュンと空気の抜ける音と共に白いロボットの頭が前後に二つに開いた。ロボットアームはその中に鎮座している黒い楕円型の物体をロボットの頭から引き抜き、シャッターの奥へと戻っていく。
シャッターの奥は暗く何が行われているかわからなかったが、十秒も経たないうちに一人の男性がシャッターの奥から歩いてきた。男性はどこにでもありそうなグレーのスーツを身に纏っており、きっちりとした印象を受ける。
スーツ姿の男性を観察していると違うシャッターが開き、今度は私の方にロボットアームが伸びてくる。ロボットアームは私の四角い胴体にある鍵穴に鍵を差し込み、時計回りに回した。
『収納容器のロックが解除されました』
そんな機械音声がどこからともなく聞こえてくる。ロボットアームは私の胴体を扉のように開くと、私の胴体に収められていた黒い楕円形の物体を引き抜いた。
次の瞬間、私の視界が暗転する。
『ＳＷ―８９の接続が解除されました』
また機械音声が聞こえる。まるでその機械音声は、私の頭に直接響いているようだった。
逆に言えば、それ以外の音が全く聞こえない。
『ＥＨ―１６に接続しました』

また機械音声が聞こえたかと思えば、次第に私の視界は明るくなった。先程までのモニターに映る映像を見ているような遠近感のない視界とは違い、まるで違和感なく周囲が見て取れる。私は目を慣らすように数回瞬きし、少し遅れて自分の目に瞼があることに気がついた。

まさか、人間の身体に戻ったのか？

そう思い私は真っ先に下を見る。そこには胸の二つの膨らみと、自然な色の肌。着ているのはパーカーだろうか、黒い布地が確認できた。

どうやら、まだ確証はないが私の身体は人間のそれに戻ったらしい。

私は両手を胸の前まで持ち上げ、何度か曲げ伸ばす。先程までのロボットアームとは違い、この腕ならピアノだって弾けそうだと感じた。

「レン？　大丈夫？」

声を掛けられて私は我に返る。声がした方を向くと、シャッターを挟んで反対側に先程の男性と白いロボット、その横には履帯のついた無骨な機械が置かれているのが目に入った。

私は恐る恐る片足を前に出す。一歩、二歩と確かめるように歩き、足が思うように動くことを確認すると、シャッターの奥にある先程までいた部屋に向けて歩き出した。

「大丈夫かい？　随分起動に時間が掛かっていたが……」

男性は心配そうに私の顔を覗き込む。私は一瞬目を逸らしたが、話を聞かないことには何も始まらない。

私は意を決して目の前の男性に聞いた。

「あのっ！　あの……ここは、一体どこですか？」

声が出るかが不安だったが、私の口は滑らかに日本語を紡ぎ出す。

私は自分の声に全くと言っていいほど聞き覚えがなかったが、今はそんなことはどうでもいい。私がレンという人物だと勘違いされたまま話を進められても困るのだ。

男性は質問の意味がわからないと言った表情で目をパチクリとさ

せている。
「えっと、ここは一体どこかというのは、『今この場所はどこか』という意味であっているかな？　あえて答えるまでもないと思うが……君もよくご存知な通り、中央管理局のエントランスだよ。もっとも、前の管理局と比べてオンボロなのは私も認めるところだがね」
　目の前の男性が言うには、ここは中央管理局という名前の施設らしい。ここにたどり着く前に案内標識で見た名前だが、標識で案内されていた先にある建物は周りにある建物同様見事に倒壊していた。男性の口ぶりからして、あの倒壊していた建物が元中央管理局なのだろう。
「……レンというのは、私のことですか？」
「はは、他に誰がいると言うんだ。名前が被るほどこの局に人は残っていないよ」
　私は重ねて男性に問いかけたが、男性は冗談だと受け取ったらしい。
　だが、モニターに映る女性は何かに気がついたらしく、表情を険しくした。
「レン、貴方自分のこと覚えてる？　もしくは、ここがどこだかわかる？」
　私は小さく首を振る。モニターに映る女性は軽く頭を抱えると、真剣な表情で私に告げた。
「初めまして。私の名前はイヴ。この中央管理局のシステムを管理している人工知能です。突然ですが、貴方に悲しい事実をお伝えしなければなりません」
　イヴと名乗った女性はそう前置きすると、話を続けた。
「残念ながら、貴方のグレインは初期化してしまいました。要するに、ここ十数年の記憶がぽっかりと抜け落ちた状態ということです」
「……記憶喪失？」
「その認識で間違いありません」
　グレインの初期化？　そもそもグレインとは一体何のことだろうか。

「そんな……冗談だろう？　本当に何も覚えていないのかい？」
男性はイヴの話が信じられないのか、私の肩を掴んで詰め寄る。だが、何も思い出すことはできなかった。
「すみません、何も……」
私がそう告げると、男性は力なく私から離れる。男性とは対照的にイヴは優しげな笑みを浮かべて話を続けた。
「いきなり自分の身体がこのような、よくわからない機械になっていて怖かったでしょう？　事情を説明致しますのでご安心ください。アキラ、休憩室に案内して」
イヴがそう指示を出すと、アキラと呼ばれた男性は我に返ったかのように顔を上げた。
「え？　ああ、わかった。レン、休憩室はこっちだよ」
アキラはシャッターとは反対の壁にある扉を開け、私を奥に案内する。扉の奥は通路になっており、休憩室は通路を進んで二つ目の部屋だった。
「ここが休憩室だよ」
休憩室は事務所を思わせる作りになっており、部屋の中央にはテーブルとソファーが置かれている。そのテーブルの横には大きなモニターが置いてあり、そこにはイヴが映し出されていた。
「どうぞお座りください。アキラは別に部屋に帰っていてもいいわよ」
「私も残る……と言いたいところだが少しカイライとの接続に違和感を感じる。少しハルに見てもらいに行ってくるよ」
アキラはそう言うと、休憩室の扉を閉めて出て行った。
「さて……話を始めますがよろしいでしょうか」
イヴはアキラが出て行ったことを確認すると、私に尋ねる。私はその質問に対し小さく頷いた。
「わかりました。では中央管理局の説明からしていきます。ここ中央管理局では現在、残留物の探索やグレインの捜索、カイライの製造及び維持管理を行っています。局員は人工知能の私を含めて四人。イヴ、アキラ、ハル……そして、レン。貴方です」

「私は……ここの局の職員だった？」
「あくまで初期化する前の、ですけどね。勿論、引き続きここで働くことも可能ですし、私たちとしてもそれを望むところではあります」
　なるほど、元々ここの局員だったならば、アキラのあの態度にも納得がいく。今まで普通に話していた同僚の記憶がいきなり消えたのだ。ショックでないほうがどうかしている。
「まあ、それはひとまず置いておいて。この世界に関する話を少しさせていただきます。その前に一つ質問ですが、外の街の様子に違和感を覚えたでしょうか？」
　私は先程見てきた光景を思い出す。少なくとも私が知っている街は、あそこまでカオスなことにはなっていなかったはずだ。
「違和感を覚えたも何も……大震災でも起こったんですか？」
　私が聞き返すと、イヴは静かに首を振る。
「いえ、それを説明するためにも、この世界のことについて簡単に説明致します」
　イヴはそこで少し言葉を溜めた。
「１９９Ｘ年、世界は核の炎に包まれた……」
　イヴは真剣な顔でそう言う。私はイヴの言葉の続きを待っていたが、イヴの顔は次第に赤くなり、途端に恥ずかしそうな表情になった。
「あの、すみません。言ってみたかっただけです」
　イヴは両手で頬をポンポンと叩く。私はイヴの冗談の意味が分からなかったが、人工知能でも照れるのだと素直に感心した。
「西暦２０３５年のことです。太陽のスーパーフレアによって世界中の電子機器が一瞬で故障し、世界中が大混乱になりました。ロシアはアメリカの高高度核爆発攻撃だと勘違いし報復のための核ミサイルをアメリカ及びアメリカの同盟国に向けて発射、世界中が核戦争に巻き込まれることになったのです」
「えぇ……」
　私は冗談のような話に、ついそんな声を漏らしてしまう。だが、あの街の様子を見る限り、あながち冗談でもないのだろう。
「呆れてしまうのも無理はありません。ですがあの時は世界中が混乱

しており、正しい判断ができる人間などいなかった……いや、その時の情勢では正しい判断だったのかもしれませんが。なんにしても、こうして起こった第三次世界大戦は二十年以上続き、世界中の文明という文明が破壊されました。その結果は貴方が地上で見てきた通りです」

確かに、あの壊れ方は尋常じゃない。この周辺を少し見ただけだが、世界中があのような状態なのだとしたら、それは世界が滅亡したと言っても過言ではないだろう。

「ちょっと待ってください。原爆がこの近くに落ちたんだとしたら、この周辺は放射能で汚染されてるんじゃ……」

「この周辺だけではありません。核爆発の熱で気化した大量の放射能物質が地球を包み込み、世界中で高い放射線が検出されました。空中、地上、海底に至るまで汚染されていない場所はありません。空が赤いのを確認したでしょうか？　あれは大気中に舞っている放射能物質が太陽の光を散乱させ、赤く見えているのです」

核兵器が恐ろしいのは爆発力ではなく、それによって撒き散らされる放射線だという話を聞いたことがある。

「生身の人間が外を出歩いたら、間違いなく健康被害に苦しむでしょう。ですがご安心ください。生身の人間は大戦中に全て死に絶えました。私の計算上、現在は一人も残っていません」

生身の人間は一人も残っていない？

「核戦争が起こって一か月も経たないうちに空は赤く染まりました。ですが、それで戦争は終わらなかった。各国は戦争継続能力を確保するために放射線に耐えうる身体を求めたんです。……そうですね、この後の話を円滑に進めるためにも、少し質問をしましょう。貴方は人間の意思や人格……要するに俗に言う『魂』というものは人間のどこにあると思いますか？」

「はい？　魂……ですか？」

突然の質問に、私はつい聞き返してしまう。

「すみません、突拍子もない話でしたね。もう少し具体的な話をしましょう。人間を上半身と下半身に切断しました。どちらに人間の魂

が宿ると思いますか？　本人だと言えるのは、どちらですか？」
　そのたとえ話はあまりにも猟奇的だったが、この質問ならば即答できる。
「まあ、普通に考えたら上半身ですよね。上半身だけで生きている人の話は聞いたことがありますが、下半身だけで生きている人間は聞いたことがないですし」
　いや、そもそも下半身だけの人間は、どうあがいても生きられない。
「では、その上半身だけ残った人間を、また胸の位置で切断したとしましょう。どちらが人間ですか？」
「……胸から上だけで人間が生きていけるとは思えませんが、上か下かなら上でしょうね」
「では、またその人間を首の位置で上下に切断したとしたら？」
「上です」
「今度は鼻の位置で」
「上」
　たとえ話に出てきた人間は、次第に細切れにされていく。私はイヴが何を言いたいのか何となく察することができた。
「そう。当時の人間も同じことを考えたのです。人間は脳さえ機能していれば、生きていると言えると。当時、ある天才的な科学者が人間の脳を摘出し、機械に接続する技術を確立させたのです」
「脳を機械に接続……」
　私は先程までの私の身体を思い出す。その身体は人間とは似ても似つかない無骨な機械だった。イヴの話が本当なのだとしたら、私の脳はあの機械に接続されていたということだろう。
「今貴方が入っているその身体……日本ではカイライと呼ばれているそれは戦時中に様々なタイプが製造されました。戦車型や戦闘機型、鋼の装甲を有した人型。はたまた貴方が先程まで入っていたような小型重機型まで」
　私はシャッターの奥から現れたロボットアームが、白いロボットから何か黒色のケースを引き抜いたのを思い出す。
「じゃあ、あの時白いロボットから抜き取っていたのは……」

「はい。あれはアキラの脳です。貴方の脳も先程作業用のカイライから今入っている人型のカイライに移されました」
　つまり、私は脳みそだけの存在になってしまったのか。
「その人型モデル、ＥＨ―１６はかなり精巧に人間を模して造られており、肌に使われているシリコンは感圧センサーで五感の一つである触覚を再現しています。まあ、嗅覚と味覚は再現されていませんが、今のこの世界では必要ないものです。動力は電気ですので、バッテリーの充電のために一日に三時間以上は指定のベッドで睡眠を取ってください」
　イヴは淡々と私の身体について説明する。生身だと思ったこの身体も、所詮はロボットの延長線上にしかないのだろう。
「あの……生身の身体に戻ることはできるんでしょうか」
　私がおずおずと聞くと、イヴはキョトンとした表情を浮かべた。
「生身に戻ってどうするんです？　地上は放射能物質で汚染されていますし、この中央管理局には既に食料の備蓄はありません。生身に戻っても一週間と持たないと思いますよ。もっとも、脳を機械に接続する技術はありますが、逆の技術に関しては全く発展しておりません」
　つまり、私はこれから先、脳だけの存在として生きていくしかないのだろう。私の元の身体を思い出すことはできないが、だからといって機械の身体に納得がいくわけではない。
「さて、慣れない経験をしてお疲れでしょうから今日はもうお休みください。休憩室を出てすぐの階段を下った左側が貴方の部屋になっています」
　イヴはモニターの左側に移動すると、右側に建物の地図を表示する。私に割り当てられた部屋は今いる休憩室のすぐ近くだった。
「明日に関しては自由に局内を見学していただいて構いません。アキラも明日は探索に出ないそうですし、ハルは基本研究室から出てこないので研究室に行けばいつでも会えると思います。私に用がある場合は局内のモニターに話しかけていただけたらいつでも対応可能です」

「わかりました。ありがとうございます」
私はイヴに頭を下げると、言われた通りに階段を下り左側を見る。そこには『れんのへや』とひらがなで書かれた表札が掛けられている扉があった。きっとここが私の部屋だろう。
私はドアノブを握り、ゆっくりと回す。鍵は掛かっていないようで、扉は微かに軋むような音を立てて開いた。
「おじゃましまーす……」
私は恐る恐る部屋の中に入る。部屋の中は私が考えていた以上に閑散としており、最低限の生活用品しか置かれていないように感じた。引き出しのついていない木製の机に、肘掛けのついたデスクチェア。その横には小さなクローゼットが設置してあり、中には数着の着替えが入っていた。部屋の隅にはベッドが設置してあり、イヴの話ではこのベッドで身体の充電ができるらしい。
机の反対側、部屋に入って左側にもう一つ扉がある。私はその扉を開けようとドアノブに手を掛けるが、扉には鍵が掛けられているらしく、開くことはなかった。
「鍵が掛かってる……でも、鍵をどこにしまったかなんて覚えてないし……」
私は扉を開けることを諦め、ベッドに横になる。
『接続完了。充電を開始します』
そんな機械音声がどこからともなく聞こえてくる。私は首の後ろに違和感を感じ、手でその位置をまさぐった。
どうやら私の首の後ろに電源コードのようなものが接続されたようだった。寝るのにそこまで邪魔なわけじゃないが、若干の違和感がある。
「ワイヤレス充電にしたらいいのに」
私は誰に言うでもなく文句を呟くと、そのまま眠りに落ちていった。

# 機械語の部屋

『ＥＨ―１６を起動しています――バッテリー残量１００％　各センサーモジュール、正常稼働中』

私は仰向けの状態で静かに目を開ける。目の前にはコンクリートの無機質な天井があり、まるで私に覆いかぶさってくるような錯覚を受けた。

しばらくそのまま天井を眺めていたが、不意に昨日の出来事を思い出し、首の後ろに手を当てる。そこには小さな端子が付いており、ベッドから伸びたコードが繋がっていた。

「夢じゃない」

いや、もしかしたらずっと夢を見ているのかもしれない。記憶が思い出せないのは、夢の中の世界だからではないか。

私はベッドから起き上がると、姿見の前に立つ。そこにはテレビやファッション雑誌に出てくるようなスタイルのいい美人が映っていたが、どうもそれが私であるという実感は湧かなかった。

「まあ、私は脳だけの存在であって、この姿は作り物だし」

ゲームの中のキャラクターを自分本来の姿だと思うプレイヤーはいない。それと同じようなことだろう。まあ生身の部位が脳だけでも残っているだけまだマシか。

私は姿見の前で服装の乱れがないか確認すると、自分の部屋を出る。確か昨日ここを管理している人工知能であるイヴが、自由に局内を探索していいと言っていたか。あの荒廃した地上に出る気も起きないので、しばらくはここ、中央管理局を探索することにしよう。

私はひとまず階段を上り、昨日一番初めに入った昇降機のある部屋に入った。そこには、昨日私が入っていたのであろう武骨な、無人探査機のような見た目の機械が置きっぱなしになっている。アキラと呼ばれていた男性が入ってた人型ロボットは既に格納されているのか、部屋の中にはなかった。

私は改めて私が入っていた機械を観察する。金属製の二つの履帯、棒をつなぎ合わせたようなロボットアーム。胴体は金庫とボイラー

が融合したような見た目になっており、胸にある覗き窓から見えていた火は今は消えている。
　胴体の上には粉砕機のようなものが取り付けてあり、その更に上には監視カメラのような見た目のカメラが付けられていた。私が昨日見ていた映像は、このカメラで撮られたものだろう。
「そのカイライが気になるかい？」
　突然私の後ろから声が掛かる。私が振り返ると、そこにはスーツ姿の男性……アキラが立っていた。
　アキラは私が観察していた機械に近づくと、ロボットアームのシリンダーを調べ始める。
「カイライ？」
「そう、カイライ。こういう機械の体のことだよ。今君が入っているのも人型のカイライ。ＥＨ―１６っていうモデルだね。私が入っているモデルがＥＨ―０５だ」
　アキラは機械の胴体の隅を指差す。そこには『ＳＷ―８９』と表記されていた。
「ＳＷ―８９、地上での長期間に渡る活動を可能にした作業用のカイライだ。動力は蒸気機関。中央管理局製の作業用のカイライでは最新のモデルだよ」
「蒸気機関で動く機械が最新モデルなんですか？」
　アキラはもっともな疑問だと頷いた。
「確かに蒸気機関なんて時代錯誤だと思うだろう。だが、時代錯誤なことに意味がある。電力で動くものは充電しないと使えない。ガソリンで動くものは石油がないと使えない。だが、蒸気機関はどうだい？　熱源と水さえあれば力を取り出すことができる。つまりは、この荒廃した世界でこれ以上の動力源はない」
　確かに、ガソリンや軽油などの液体燃料を探すよりも、なんでもいいから燃えるものを探すほうが容易だろう。
「でも、貴方が入っていたカイライは蒸気機関ではなさそうでしたけど……」
「あのカイライはＥＡ―３８、太陽光充電システムを搭載した人型の

カイライだ。もっとも、今私たちが入っているような人間の体を限りなく模したモデルではなく、あくまで作業用に作られたモデルだがね。外装も強化プラスチックで作られているし。だが、太陽光発電というのは効率が良くない上に天候や時間帯に左右されやすい。この周辺を探索する程度ならいいけど、何週間も何か月も外で活動できるわけじゃない」

アキラは壁に付けられているボタンを操作する。するとシャッターの奥からロボットアームが伸びてきて、作業用のカイライを回収していった。

「この中央管理局は地熱発電を行っていて安定した電力を確保できている。だが、地上にあったインフラは壊滅だ。局内ではいつでもカイライの充電を行うことができるが、地上ではそうはいかない。だからこそ、外で長時間――ようは遠出ができるカイライの研究というのは重要なんだ」

だからこその蒸気機関ということなのだろう。私が感心していると、アキラが何かを思いついたかのようにこちらを見た。

「そうだ。よかったら私の部屋で少し話さないかい？」

私はその誘いに少々悩んだが、特にすることもないので部屋にお呼ばれされることにした。

「それはよかった。話し相手に飢えていたんだ」

アキラはにこやかにほほ笑むと通路の奥へと歩き出す。私はその後ろをついていった。

アキラは部屋を出て通路を進むと、階段を下りて右側の部屋に入る。どうやら私の部屋とアキラの部屋は隣同士らしい。アキラの部屋は私の部屋と比べると物が多く、本や小物、中にはガラクタにしか見えないものまで床に散乱していた。

「少し散らかっているがゆっくりしてくれ」

私は勧められるままに椅子に座る。アキラは対面するようにベッドに腰かけると、改めて私を見た。

「……怒らないんだね」

少しの沈黙の後、アキラはどこか寂しそうに言う。

「怒る？　何に対してです？」
「いや、初期化する前の君はよく私の部屋を見て片付けろと説教していたからね」
　まあ、確かに散らかっているとは思うが。あの驚くほど殺風景な部屋とどちらがマシかと問われれば、答えを出すのに時間が掛かるだろう。
「改めて、私の名前はアキラだ。よろしく頼むよ」
　アキラは私に対し右手を伸ばす。
「はい、よろしくお願いします」
　私も右手でアキラの手を握り返した。
「ああ、よろしく。レン」
　やはりレンというのが私の名前なのだろう。自分の名前を覚えているわけではないが、姿見で身体を見たときよりかはしっくりくるものがある。
「そういえば、もう一人局員がいるって言ってましたよね。イヴさんと、アキラさんと、あと……」
　私は話題を探すようにそんな話を切り出した。記憶を失くした私からしたら、話せる話題というのはあまり多くない。今は少しでも情報を集めるのに専念したほうがいいだろう。
「ああ、ハルのことかい？　彼はいつも自分の研究室に籠っているからこちらから会いに行かないとなかなか会わないだろうね。でも、グレインやカイライに関しては右に出る者がいないから、何か不調があったら彼を訪ねるといいよ」
「なるほど……」
　つまりは医者のようなものだろうか。今のところ用事はないが、近いうちにこの体について詳しい話を聞きにいかなければならないだろう。
　私は今の自分の身体と、アキラの身体を見る。どちらもあまりにも造形がいいので、まるで映画のワンシーンのようだ。
「そういえば、私やアキラさんはカイライという身体を持っていますが、イヴさんは持っていないんですね」

私はふと気になったことをアキラに聞く。私やアキラは自由に動かせる体を持っているが、人工知能であるイヴはモニターの中にいる存在だ。だが、あそこまで自由な意思を持っている存在が、カイライ一つ操作できないはずがない。技術的には十分可能なように思えた。
「ああ、そうだね。イヴはカイライを使っていない。理由はいくつかあるが……昨日この管理局に帰ってくる前に崩壊した旧中央管理局が見えただろう？」
私は昨日の地上の様子を思い出す。確かに中央管理局であろう建物は完全に崩壊していた。
「あの建物を崩壊させた原因が静止軌道上に存在している。――衛星兵器だよ」
アキラは天井を指差す。いや、その指は天井ではなく、衛星軌道上にある兵器を指差しているのだろう。
「戦時中に各国が競うように打ち上げてね。戦争はすでに終結したが、衛星兵器自体は生きている」
「神の杖……」
私はふと思い浮かんだ単語を口にした。確か、金属製の槍を衛星軌道から地上に射出する兵器だったか。
「いや、神の杖ではない。レーザー兵器だ。静止軌道にある衛星というのは止まっているように見えて地球の重力に抗えるほどの速度で移動している。衛星軌道上から質量のあるものを落とそうとするとかなり減速しないといけない。だがレーザーなら話は別だ。光子に質量はないから衛星軌道から攻撃するのにかなり都合がいい」
コンクリート製の建物を崩壊させるほどの威力を持つレーザー兵器。まあ、そこまではわかった。だが、その話とイヴがカイライを使わない理由は関係あるのだろうか。
「衛星兵器は二つのタイプに分類されてね。一つは地上から電波や光信号によって座標を指示するタイプ。もう一つは、ある条件が揃うと対象に攻撃をする自律タイプ。条件というのは色々あるが、一番脅威となり得るのは電波を受信するとその発信源に攻撃を行う自律タイプだろう」

「電波を受信すると……ということは――」
「ああそうだ。無線通信は使えない。地下でカイライを動かすような小出力で高周波数の電波なら衛星にサーチされる可能性は低いが、中央管理局が崩壊した原因はワイヤレスマウスが発する電波だ。可能性はゼロではない」
　実質電波を発する製品は使えないということだろう。
「勿論、有線接続すればカイライを動かすことはできる。ハルが作ったカイライを有線接続して動作テストしているのを見たことがあるしね」
　私は昨日のベッドの充電コードを思い出した。確かワイヤレス充電も電波を発しているんだったか。
「まあ、旧管理局は地上は崩壊しているけど地下の機能は生きている。実際ハルの研究室は旧管理局の地下にあるし、イヴの本体、メインコンピュータも崩壊した旧管理局の地下だ。ここまでケーブルを張っているんだよ。そういう意味では、中央管理局というのはあの崩壊した建物の地下だと言えるかもしれないね」
「じゃあ、私たちが今いるここは……」
「勿論、ここも管理局だよ。私たちの中では崩壊したほうを旧管理局と呼んでいる。今の管理局は当時は中央管理局に電力を送る発電施設だったんだ。この部屋も、レンの部屋も当時は発電施設の従業員の更衣室だったんだよ。それを改装して今は居住スペースとして使っている。旧管理局の地下から地上に繋がる階段は全て瓦礫で埋まっているから、地下で旧管理局と繋がっているこの発電施設は都合がよかったんだ」
　なるほど、まるで工場のようだと思ったが、ここはあくまで発電施設の管理のための空間だったらしい。あまり居住性を意識した作りではないのだろう。
「発電施設の管理はイヴが行っているよ。私も手伝うことはあるが、あまり機械的なことには詳しくなくてね。基本指示されたことを指示された通りに行うだけだ」
「じゃあ。いつもはどんな仕事を？」

私が聞くと、アキラは少し考えた後話し始めた。
「そうだね……主に私は地上の探索や汚染状況の調査を行っている。たまにハルが作ったカイライの動作テストを引き受けたりもするかな。まあ、イヴとハルの二人がいれば、中央管理局は何とかなる。私たちはあくまでゲストだ」
なるほど、つまり私の記憶が消えたところで管理局の運営自体には影響がないということなのだろう。
「逆に言えば、イヴの本体であるコンピュータが破壊されたり、ハルが死んでしまったりしたらここは管理局としての機能を失う。そしたら、私たち人類は終わりだ」
「ん？」
いきなり話が飛躍したような気がして、私はつい聞き返してしまう。
「人類は終わり？」
「これはあくまで推測なんだけどね。多分私たちが最後の人類だろう。こちらから送信はできないが、宇宙からの電波を受信することはできる。イヴが世界中の観測衛星からの映像を解析しているが、人間が生きてる痕跡を見つけたことはない。もうすでに三十年以上、地上で活動しているのは私たちだけだ」
つまり私たちが死んだら実質人類が絶滅したようなものということか。脳だけの存在の私たちに生殖機能があるようには思えない。これ以上人類が増えることはないのだろう。
「だからこそ、私は局員のことは家族のように思っている。勿論、君ともまた家族になれればと思っているよ」
アキラはそう言うと私に対し笑みを浮かべた。その目はどこか自分の子供でも見るかのように優し気で、柔らかいものだ。
「――ッ……ありがとうございます」
私はその笑顔に奇妙な居心地の悪さを感じ、目を伏せ小さく頷くことしかできなかった。アキラもそれを察したのか、ベッドから立ち上がる。
「何かわからないことがあったら聞くといい。まあ、イヴとハルの二

人のほうが私よりも詳しく答えてくれそうだがね」
「はい……ありがとうございます」
私は椅子から立ち上がると、お礼を言ってアキラの部屋を出る。
記憶を失う前の私とアキラがどのような関係だったのかはわからない。だが、既に私の時間とアキラの時間にはズレが生じている。記憶を失う前と同じ関係になることはないだろう。
私は自室には戻らず、階段を上って今度は休憩室に入る。改めて休憩室を見回すと、部屋の隅の棚に置かれた写真立てを見つけた。
「これって……」
私はその写真立てを手に取る。写真立ての写真には私とアキラ、モニターに映るイヴ、そしてハルだと思われる男性が写っていた。
「その写真は三年前にアキラが地上で見つけてきたインスタントカメラで撮った写真です」
突然声がして振り返るとモニターの電源が入っており、イヴが表示されていた。
「勿論、局の中にも監視カメラやデジタルカメラは沢山あるんですが、こういうのは珍しくて。本当はハルをこっちに引っ張ってきて写真を撮りたかったんですが、結局ハルの研究室で撮ることになったんです」
確かに写真に写っている部屋は今いる部屋と比べるとどこか近未来的で、よくわからない装置や器具がごちゃごちゃとしている。私は写真立てを元に戻すと、ソファーに腰かけた。
「先程、アキラさんと少し話したのですが……」
私はイヴに先程までアキラと話していた内容を伝える。イヴは話を最後まで聞くと、小さなため息をついた。
「アキラはそんなことを……これはあまり参考にしないでほしいのですが、病院で眠りについていた貴方を見つけ出し、この中央管理局に連れてきたのはアキラなんです。その時の貴方は今と同じように記憶を失っていた。そこから先の貴方とアキラは、まるで親子のようでした」
恋人ではなく、親子か……。確かに、アキラの目はどこか見守るよ

うな優しさを感じる。
「私は記憶を失ったのではなく、初期化したといいましたね。そう、初期化したんです。貴方の記憶は拾われてきた当初に戻ってしまった」
「一体何が原因で？」
「詳しい原因はわかりませんが、グレインに供給される電力が一時的に途絶え、記憶が揮発したのかもしれません」
　記憶が揮発する？
　原理はわからないが、イヴが言うには起こりえないことではないらしい。
「まあでも、思い出はまた積み上げればいいんです。記憶を失ったことは悲しいことではありますが……死んだわけではないんです。生きていれば、いくらでもやり直せる」
　イヴはそう言うが、その表情はどこか悲しげだった。そんな表情をするイブに、私は話題を変えるために適当に話を切り出す。
「なんというか、人工知能でも悲しかったり嬉しかったりするんですね。私も脳だけの存在ですし、実質的には私たちはあまり変わらないのかも」
　フォローになっているかわからないが、なんにしても話題は変えられるはずだ。私はモニターに映るイヴをじっと見る。イヴは私の期待通り、クスリと笑った。
「はは、何を言ってるんですか。私はコンピュータで、貴方は人間です。私はあくまで人間の感情を模倣しているだけ。そこに感情はありませんよ」
　イヴは笑顔でそう言う。
「でも、笑ったり、悲しんだり、かなり表情豊かなように思いますが……違うんですか？」
　感情がないというのは彼女なりの冗談だろう。私はそう考えたが、イヴは真面目な表情で答えた。
「感情があるように見えるだけで、そこに感情があるとは限りません。私たちコンピュータが人間らしく振舞うのに、感情というものは必要ないんです」

こんな話を知っていますか？　そうイヴは続ける。
「ある英国人に個室に入ってもらいます。その個室の中には一冊の本が置かれているんです。本のタイトルは『完全中国語マニュアル』。中国語で書かれた文章を索引から探すと、該当のページにその中国語に対する完璧な中国語での返事の出し方が書いてあります。ただ、中国語の意味自体は書いていません。あくまで中国語で書かれた文章……手紙にしましょうか。意味は分かりませんが完璧な手紙の返事を出せる本が置かれているんです」
つまり、中にいる英国人は中国語の意味は全く分からないが、中国語で書かれた手紙の返事は書けるということか。
「さて、その個室に中国人からの手紙を入れてみましょう。英国人は必死にマニュアルをめくり、見様見真似で完璧な中国語の返事を書き上げることができます。では、その手紙の返事を受け取った中国人はどう思うでしょうか。勿論、中国人は部屋の中に英国人がいるとは知りません」
中国人からしたら、中国語の手紙を出したら中国語の手紙が返ってきたのだ。部屋の中には中国人がいると思うのが普通だろう。
「そうです。手紙の返事を英国人が書いたとは思わないでしょうね。では、質問です。その手紙に、感情はありますか？」
英国人は意味も分からずマニュアル通りに手紙を書いただけ。つまり、その手紙が中国語でどれだけ感情的な文章が書かれていたとしても、その手紙は機械的な作業で生み出されたに過ぎない。そこに感情は籠っていない。
「そう。それが人間とコンピュータの違いです。私たちはただ膨大なマニュアルを参照して返答しているだけに過ぎません。マイクから入力された信号をコンピュータで処理し、モニターとスピーカーで出力する。それはあくまで物理的な現象であって、そこに感情は、主観は、意識というものは必要ないんです」
そう言うイブの表情はどこか寂しそうだった。
「なので、もしもの時は躊躇はしないでください。どちらかを選択しないといけなくなった時、私を優先する必要はありません。私は……

あくまで機械ですので」
　そんな物騒なことが起こるとは思えないが、地上の惨状を見る限り起こり得ることなのだろう。アキラはイヴの存在をこの中央管理局になくてはならない存在だと言った。だがイヴの中では自身の存在は私たちよりも下らしい。
「そんなこと……きっと起こりませんよ」
「はい、私もそれを望んでいます」
　イヴはそう言って微笑む。だが、イヴの話が本当なら、あの表情の下に感情はない。そう思うと、その笑顔も自己犠牲的な発言も途端に不気味に見えた。
　私はイヴから逃げるようにソファーから立ち上がると、休憩室を後にする。アキラから逃げ、イヴからも逃げ、ここに来てから逃げてばかりだ。
　私は階段を降り、自分の部屋に入る。先程起きたばかりだが、私は力尽きるようにベッドに横になった。
「肉体を捨てた人間……感情があるように見えるコンピュータ……滅亡した世界……」
　そもそも、今は何年だ？
　私はいつ生まれて、今まで何をしていたんだ？
　脳だけの存在になり、機械の身体に詰められて生き延びている。脳だけで生存できるのなら、水槽にでも浮かべて仮想世界に接続してほしい。
　ついそう思ってしまうほど、今の世界は残酷だった。

# テセウスの脳

ベッドで横になっていたらいつの間にかうたた寝をしてしまっていたらしい。私はベッドから起き上がると、部屋にあるクローゼットを開けた。クローゼットの中には作業用らしきツナギやワンピースなどが特に種類ごとに分けられることなくハンガーに掛けられている。その他には小物や工具のようなものはあったが、めぼしいものは見つからなかった。

「私の部屋にある扉の鍵はないか」

私はもう一度部屋にある扉を開けようとドアノブを回したが、扉が開くことはない。

「……開かないなら仕方ない」

私は扉を開けるのを諦め、自分の部屋を出る。今が何時かわからない。時計を探しながら少し局内を探索しよう。

私は階段を下り、通路を歩く。アキラが言っていた通り、ここは発電施設だったらしい。『高電圧注意』と書かれた部屋や、壁一面にスイッチのようなものが付いてある部屋。カイライの整備工場のような場所や、格納庫も見つけることができた。途中鍵がかかっている部屋がいくつかあったが、そのどれもが事務所や所長室など、特に興味も湧かない部屋ばかりだ。

私は更に階段を下る。地下三階まで下りると、先程までと違い長い通路が続いている空間に出た。通路に扉等はなく、ただ所々に明かりがついているだけである。通路の隅には太いパイプのようなものや、ケーブルが何本も伸びており、通路の奥へと続いていた。

「奥には一体何が……」

私は興味本位でその通路を歩き始める。

何もない通路を五分以上は歩いただろうか、通路の突き当りに辿り着く。そこには金属で出来た扉があり、扉の上には『中央管理局』と表記がなされていた。

「発電施設は地下で旧管理局と繋がっているってアキラが言っていたっけ」

私はドアノブに手を掛け、恐る恐る押した。金属製の扉は重たい手ごたえとともにゆっくりと開く。

扉の奥は今までの通路とは打って変わって、白い壁に白い床、白い天井と白色で統一された清潔感のある空間が広がっていた。まるで病院か研究所のようだと思ったが、その予想はあながち間違っていないだろう。目の前の部屋には『脚部機能試験室』と表記がされており、その向かい側の部屋には『人工筋肉培養室』と表記されている。そして見るからに後から敷かれたのであろうケーブルが、白い床の上に黒いラインを引いていた。

「まるでヘンゼルとグレーテルだ」

ヘンゼルが道しるべに使ったのは白い石だったか。

私は黒いラインに沿って研究所のような空間を歩く。ケーブルが床に描くラインは奥へ奥へと続いており、周囲にある部屋の名前も理解の及ばないものになっていく。『摘出室』とだけ書かれた部屋や、『置換室』と書かれた部屋、中には『安置室』と書かれた部屋もあった。少々気味が悪くなってきたが、ここまで来たのだ。ここで引き返すのは少々勿体なく感じる。

しばらくケーブルを辿っていると、ケーブルはとある部屋の奥へと続いているのがわかった。『第一研究室』……そう書かれた部屋からはキーボードを叩く音が聞こえてくる。私は足音を立てないように部屋に近づくと、扉の隙間から部屋の中を覗いた。

部屋の中には大きな机が設置してあり、そこにモニターが三台並べられている。モニターの前には座り心地が良さそうな大きな椅子が置かれており、キーボードを打つ何者かを完全に隠していた。その他にも、部屋の中にはよくわからない器具や機械が所狭しと並んでいる。

私はその部屋に見覚えがあった。休憩室にあった集合写真に写っていた部屋によく似ている。ということは、部屋の中でキーボードを打っているのは――

「入っていいぞ」

私が扉の前にいることに気が付いていたのか、部屋の中から舌足ら

ずにも聞こえる高い子供の声が聞こえてくる。入っていいと言われて黙って引き返すわけにもいかないので、私は意を決して部屋の中に入った。
「貴方がハル？」
　私が声を掛けると、大きな椅子がくるりと回転し、こちらを向く。そこには十歳ほどに見える少女が座っており、ダボダボの白衣を袖まくりをして身に着けていた。
「ああ、いかにも。俺がハルだ。イヴから色々話は聞いている。初期化しちまったんだってな」
　思わず見とれてしまうような容姿をしている少女は、幼く透き通るような声でそう言った。
「どうもそうみたいで――」
「まあ人生色々ある。俺だってそうさ。まあ、まだ記憶を失ったことはないが……取り敢えず座れよ。初期化によってグレインに異常が出ていないか少し検査するから」
　ハルは大きな椅子から飛び降りると、部屋の隅にあった丸い回転椅子を手に取り、自分の近くに引きずってくる。私がその丸椅子に座ると、ハルはまた大きな椅子に飛び乗った。
「にしても災難だったな。まあ完全にデータが飛んでないだけまだマシだが……っと、ケーブル挿すぞ」
　ハルは椅子の座面に立つと、私の首の後ろに黒いケーブルを繋げる。そして椅子に座り直し、キーボードを叩き始めた。
「んー、特にグレインに異常はなさそうだな。初期化の理由も一瞬電力の供給が途切れたからだろう。カイライの不調か？　いや、それにしてはその後の経過が良すぎるしな……何か強い電気ショックを受けたのかもしれないな」
　ハルはその容姿には似つかない荒々しい口調でそう言う。いや、そもそもハルは男じゃなかっただろうか。休憩室で見た写真にも、無精ひげを生やした中年が写っていたと記憶している。
　私の視線に気が付いたのか、ハルは部屋の隅を指差した。私はその方向に視線を向ける。そこには写真で見た中年男性が、力なくベッド

に横たわっていた。
「少し細かい作業をしなくちゃいけなくてな。どうだ？　可愛いだろ」
　ハルは小さな手をひらひらと振る。確かに男性の太い指よりも細かい作業はやりやすそうだった。ということは、やはりハルは男性なのか……
「なんだ、あんまり奇怪な目で見るなよ。おっさんが幼女のカイライ使っちゃいけないのか？」
「いえ、別にそんな……」
　正直ドン引きしているが、ハルはあっけらかんと答えた。
「グレインだけの存在になった時点で俺たちに性別という概念はほぼ消えた。つまりはあんたがあのおっさんのカイライに入ってもいいし、俺が少女のカイライに入ってもいい。さてはオンラインゲームで男が女性キャラを使うのはキモイって考えるタイプだな？」
　なるほど、そう例えられるとあまり違和感のない行為のようにも思えてくる。
「っと、自己紹介がまだだったな。俺はハル、科学者だ。この中央管理局でグレインの調整やカイライの制作をしている」
「私は――」
「レンだろう？　よく知ってるよ」
　私が自己紹介する前に、ハルが言った。
「まあ、レンという名前が本当に私の名前なのかも、私にはわからないんですが……」
「いや、お前は間違いなくレンだよ。グレインにはそれぞれシリアルナンバーが振られている」
　ハルはそう言うと、机の引き出しから小さな鍵を取り出し、首の後ろに挿す。そして自分の頭を前後に開いた。その光景はあまりにもグロテスクだったが、頭を開いた状態でハルが自分の頭を指差す。
「ほら、ここだ」
　ハルが指差した場所には白い文字で『ＧＢ．ＪＰＴＹＯ―１　ＨＡＬ』と書かれていた。

「これと同じようなものがお前のグレインにも書かれている。グレインにはそれぞれ個人の名前が刻印されるんだ。つまり、レンという名前はもともとのお前の名前ってわけさ」
　私の名前はレン。私は自分の名前を改めて認識した。
「まあだからといって、記憶を失う前のお前と今のお前が同一人物だとは思っていない。記憶を失うというのは、人格としては死を意味する。レンは一度死に、違う人間として生まれ変わった。つまり、お前は初期化された瞬間生まれた新しい人格だということだ」
「記憶が消えると、人格は死ぬ……そもそも、脳への電力の供給が滞ると記憶が消えるというのはどういうことなんです？　脳に必要なのは電力ではなく糖や酸素では？」
　私がそう質問すると、ハルはキョトンとした顔をした。幼い顔で小さく首をかしげる仕草は非常に可愛らしいが、中身がおっさんだということを考えれば素直に可愛いと言って良いのか疑問が残る。
「ああ、そういうことか」
　そして、何かに気が付いたのだろう。ハルはポンと手を打った。
「レン……人類が何のために生身を捨てたのか忘れたのか？　ああいや、忘れたんだったな。人類はな、放射線に負けない身体を手に入れるために身体を捨てたんだ。脳が生身では元も子もないだろう」
「……え？」
　脳が生身ではない？
　確かに、脳は神経細胞の塊だ。強い放射能を受けたら何かしらの影響が出て然るべきだろう。だが、だからと言ってハルの言葉が理解できるわけではない。
「まさかグレインの中に生身の脳がそのまま入っているとでも思っていたのか？　なんでグレインなんて名前なんだと思う？」
「てっきり、ブレインが訛っただけかと……」
「そんなアホらしい理由なもんか。グレインの語源はグラファイトとブレインだ。つまりは黒鉛の脳。あのな、レン。俺たちに生身の部位なんて残されていないんだよ」
　私に生身の部位は残っていない……。だとしたら私は……いや、人

間とは一体なんなんだ？
　作り物の脳に、作り物の身体。そんな存在が、本当に人間だと言えるのか？
「まあ深く考えるな。所詮脳も情報を機械的に処理しているに過ぎない。だとしたら代用することも可能だ」
　ハルはそう言うが、それには大きな問題があるように思えた。
「でもそれじゃ……人間を模しているだけの機械なんじゃ……そもそも機械に魂を移すことなんてできるの？」
「ふむ、確かにな。意識の転移というのは科学者の永遠の課題だ。ここまで脳科学が発展した今の時代ですら意識や、クオリアといったものの正体を突き止めることはできてねぇ」
　ハルはキーボードを叩く手を止めずに話し出す。
「例えば、今机の下にあるコンピュータ。このコンピュータは人間の脳の代用をするのに十分な性能を有している。さて、このコンピュータに俺の脳の情報をそのままコピーしたとしよう。するとどうなると思う？」
「貴方の人格が、そのままコンピュータにコピーされる？」
「ああそうだ。コンピュータ側はそれでいい。じゃあ、コピー元の俺はどうなる？　コンピュータにはあくまで脳の中の情報をコピーしただけだ。俺の意識は、人格はどうなる？」
「そのまま残る？」
　別に脳の中にある情報を移動させたわけじゃない。コピー元はそのまま残るはずだ。
「そう、つまりは俺が二人生まれるわけだ。コンピュータ側の俺からしたら人間の身体からいきなりコンピュータに詰め込まれたと認識するだろうが、本当に俺の意識がコンピュータに移ったわけじゃねぇ。あくまでコンピュータ側に俺にそっくりの人格が生まれただけだ。じゃあ、こうするとどうなる？」
　ハルは机の引き出しから拳銃を取り出すと、自分のこめかみに当てた。
「――ッ！」

「モデルガンだよ。仮定だ仮定。仮にコピーが終わった瞬間、コピー元を殺したとしよう。そうしたら、コピー元の意識はどうなる？　死んだ瞬間コンピュータに移動するのか？　それとも、撃ち殺した瞬間、人間側の意識は死ぬのか」
「……死ぬと思います」
「ああ、俺もそう考える。だが、意識というのは他人からは認識もできないし観測もできない。証明もできなければ解明すらできていない。赤の他人からしたら、死んだコピー元の意識が死のうが、コンピュータ側の人格が新しくできたものであろうが関係ないんだ。第三者から見たら、俺の人格がコンピュータに転移したようにしか見えない」
　確かに、脳の情報がそっくりそのままコンピュータに移されているのだとしたら、コンピュータは完璧にその本人の動きや話し方をトレースするだろう。第三者から見たら区別できないはずだ。
「じゃあ、今の私も、アキラも、ハルさんも……元の人格は死んでいるってことですか？」
　思考する機械。作り方が違うだけで、私の存在はイヴと殆ど変わらないのではないか？
　私が感じている意識は、感覚は、本物なのか？　私の苦悩が表情に出ていたのか、ハルは小さく肩を竦める。
「もし、グレインを別に作り、そこに脳の情報を転送したとしたら、元の人格は死んだことになるだろうな。だが、俺が作りたかったのは人間のコピーじゃない。俺は、人間を、人類を存続させたかった。人間によく似た機械を作りたかったわけじゃねぇ」
　ハルはキーボードを叩く手を止めた。そして椅子を回し、私に向かい合う。作り物の二つの眼球が、私の目をじっと見ていた。
「だからこそのグレイン。『脳の炭素化』だ」
　脳の炭素……化？
「テセウスの船という思考実験を知っているか？　テセウスの船と飛ばれる木造船を古いパーツから順番に新しいパーツに交換していくんだ。修理に修理を重ね、ついにテセウスの船のパーツは全て新しくなってしまった。さて、その船はテセウスの船だと言えるだろうか

？」
「……私は、それはテセウスの船だと思いますけど」
「まあこの思考実験に対する答えは人それぞれだ。だが、これは人間の身体でも常に行われている。代謝だよ。人間の身体は代謝によって日々新しいパーツと交換されている。まさにテセウスの船だ。意識が移動できないなら、意識が入っている入れ物のほうを入れ替えるんだ」
　ハルは机の隅に置いてあった黒い石を手元に持ってくる。
「脳細胞を少しずつグラファイトと置き換えていくんだ。脳を頭蓋骨から引きずり出し、専用の処理装置に繋いで特殊な薬品に漬け込む。すると数時間もしないうちに脳はグラファイトに置き換わる。コピーを取っているわけではないから、出来上がった炭素の脳が正常に動けば意識の問題は解決だ。どうだ？　画期的だろう？　意識や人格のことはこれっぽっちも解明できてねぇが、そういう問題を全て回避して機械の身体を手に入れることができる」
　確かに脳の部品を少しずつ別のものに置き換えていくとしたら先程のような問題は起こらないのかもしれない。だが、そんなこと……本当に許されるのか？
「単細胞生物から進化した人間はついに新しい進化を遂げた。新たなステージに立ったんだよ。人間は自らの手で自分たちを進化させることができるようになったんだ」
　……狂っている。そんなもの、あまりにも倫理に反している。
「そんなの……進化じゃない」
「なんだって？」
　私の口から零れた言葉をハルは聞き逃さなかった。私は意を決して言葉を続ける。
「そんなの、もう人間じゃないですよ……」
「じゃあレン。人間とはなんだ？　生身の肉体を持っていなければ人間じゃないのか？」
「それは……」
「……すまん、意地悪な質問だったな」

ハルは私から目を背けると、小さな手でキーボードを叩き始める。
「だが、当時はそんなことを議論できる余裕はなかった。正しいか正しくないかは問題じゃない」
ハルはしばらく無言でキーボードを打っていたが、やがて作業が終わったのか手を止めて私の首の後ろに繋がれたケーブルを引き抜いた。
「よし終わりだ。グレインに異常なし」
どうやら話している間、ずっと私のグレインを検査していたらしい。ハルは棚から私のカルテと思われるファイルを取り出すと、ドイツ語で何かを書き込んだ。
「まあなんにしても現状お前の脳は炭素で、身体は機械だ。不具合を感じたら相談しにこい。俺はいつもここにいるからよ」
「……ありがとうございました」
私はハルにお礼を言って、椅子から立ち上がる。そしてそのまま部屋を出るためにドアノブに手を掛けた。
「ああそうだ。すっかり忘れていた」
私が扉を開いた瞬間、ハルが何かを思い出したように声を掛けてくる。
「お前に最後に会ったとき、忘れそうだから俺にも覚えておいてほしいと言われたことがあってな。『ポケットの中』って言葉に聞き覚えは……まあ、ないよなぁ」
私はそう言われて、パーカーのポケットに手を突っ込む。だが、そこには何もなかった。
「忘れてくれ。亡者が残した戯言だ」
私は今度こそ研究室を出る。部屋の中からは、またキーボードを叩く音が聞こえ始めてきた。私はケーブルを辿りながら施設の中を歩き、長い通路へと戻る。
初期化する前の私の人格は死んだとハルは言っていた。では、今の私の人格はどこから発生した？　もし私の意識が炭素の塊から発生したのだとしたら、私は人間と呼べるのか？
そもそも、私とは一体なんなんだ？

私は自室に戻り姿見の前に立つ。
「お前は誰だ？」
私は鏡に映る自分を指差してそう言うが、鏡の中の私は同じことを聞き返すだけだった。

# 沼に落ちた雷

私が中央管理局に来てから数日が経過していた。
私はひび割れたアスファルトの上を、足の置き場を選びながら慎重に進む。金属で出来ている私の足は、アスファルトを踏むたびに重たい足音を立てた。足の裏の感覚はない。いや、今私が入っているカイライには触覚が存在しなかった。
「ふむ、いい感じだな。駆動系が電力以外の人型のカイライは久しぶりだが、思った以上に機敏に動く」
私の横では触覚のないカイライの動かし方に慣れているアキラが瓦礫の上を飛んだり跳ねたりしている。
「だが、強度を重視しているためか少々重たいのが難ありだね。パワーはあるから動作自体に問題はないが、その分足場を崩しやすい。何かに登るときは要注意だ」
私は今、アキラとともにハルが作ったカイライの地上試験を行っていた。ハルの新作は蒸気機関で動く人型のカイライであり、私が当初入っていたカイライと仕組み自体は大きく変わらないという。だが造形はかなり人間に近づけており、手足は勿論のこと、顔もかなり作りこんである。全て金属で出来ているため生身の人間とは似ても似つかないが、服や靴、マスクなどを揃えたら人間に見えなくもないだろう。
「関節にモーターが入っていないから関節周りがスマートだ。シリンダーの位置も人間の筋肉を模している。間接の可動域もわざと制限して人間のそれに近づけているようだね」
私は指を滑らかに動かす。すると前腕に付けられた複数のシリンダーがそれに合わせて伸び縮みした。蒸気圧で動いているとは思えないほど精密な動きをするそれは、ハルの技術力の高さを物語っている。
「制御系は電気で、動力系は蒸気で駆動してるみたいだね。ボイラーがかなり小型になっているし、燃料の汎用性も高い」
私は道に落ちている看板の木片を拾うと手で握りつぶしてから口

の中に入れる。そして口の中で粉砕し、そのまま飲み込んだ。このようにして燃料を補給するらしい。
「でも、ハルさんって本当に器用なんですね。こんなカイライも作れるなんて……」
　私はアキラにそう声を掛ける。
「まあ、彼は日本を代表する科学者だからね。ハルは一人でグレインやカイライの技術を開発し、世界中に公表した。ハルはグレインの技術を独占しなかったんだ」
　なんというか、それは意外な事実だった。ハルのあの性格上、自分の利益のために技術を独占しそうな気がする。
「戦争は既に始まっていたが、各国はグレイン技術に多大なる予算を費やして研究を進めた。一番初めに実用化に至ったのは確かアメリカだったか。それに続くようにロシアが実用化し、日本、ドイツと各国がグレインの実用化に至ったんだ。いや、実用化というのは少し違うな。ハルの研究を再現できたというほうが正しいか」
　つまり、ハルが公表した研究データを再現できたのが、先程の順番ということだろう。グレインやカイライの技術自体はハルが既に完成させていたのだ。
「でも、なんでハルはグレインの技術を公表したんでしょう。独占できれば莫大な資金を手に入れていたはずなのに」
「ハルはこうなることを予見していたんだろうね。こんな状態になったらいくらお金を持っていても意味がない。それよりも、少しでも多くの人間が助かる方を選択したんだろう。それこそ、敵味方関係なく、国の垣根も越えてね。それか、逆に全てにおいて無頓着だったか」
　アキラは片手を瓦礫の端に引っ掛けると、そこを支点にしてぐるりと身体を回し、瓦礫の山に飛び乗る。
「実験体が欲しかったんじゃ……」
「何のためにさ。それに公表された研究データはあまりにも狂気に満ちた内容だった。ハルは自らの身体を実験材料にして、その結果を研究の成果として公表したんだよ。動物での検証の後、世界で一番初めに脳を炭素化したのはハルだった。しかも執刀医もハルだったって

話だから驚きだ」
　つまりハルの脳を摘出したのはハル自身ということか。……いや、それはおかしいんじゃないか？
「そんなの、どうやって……」
「彼は空のグレインに自分の記憶をコピーしてカイライに入れ、自分の分身を作り出した。そして自分自身を手術させたんだ」
　私は研究室でハルとした会話の内容を思い出す。コンピュータに自分の記憶をコピーしたらどうなるか。
　彼は、自らの身体で試してたのだ。
「その、コピー先のハルはどうなったんです？」
「研究データによると、全ての作業が終わった後に処分されたらしい。ハルは全てを理解して、自分のコピーを作ったんだ」
「……狂ってる」
　私は瓦礫の上にいるアキラを見上げて言う。日の光に照らされ金属の部品が赤く輝いている。アキラは少し目を細めた。
「そんなこと、彼に言ってはいけないよ。あの時は世界の全てが狂っていた。確かに当時、彼の知識は、グレインの技術は必要とされていた」
　アキラは瓦礫の上から飛び降りる。軽い地響きとともにアキラは私の横に着地した。
「少し関節が軋むが、これぐらいなら大丈夫そうだな。それに、レン。君もグレインの技術に助けられた人間の一人じゃないか」
「そう……なんですかね」
「そうとも。君が今生きているのがいい証拠さ。脳を炭素化できるのは一部の人間だけだった。それにカイライも一般人が買えるような値段じゃなかったしね。希望しないものまで脳を炭素化させる余裕は当時の政府にはなかった。つまり、君は望んで脳だけの存在になったんだ」
　今の私の倫理観では考えられないことだった。当時の私は一体何を考えて、自分の身体を機械にしようだなんて思ったんだろう。
「君は脳の炭素化が間違ったことだと思うかい？」

「正しくはないと思いますけど……」
　私が遠慮がちにそう言うと、アキラはうんうんと頷いた。
「当時も同じような考えの人は少なからずいた。そんなこと倫理に反してるってね。だけど、そういう人は次第にいなくなっていったよ」
「周りに流されて自分の考えを変えたってことですか？」
「まあ、そういう人もいたけど、それだけじゃない。グレインに反対した人間は環境に適応出来ずに皆死んだ」
　自然淘汰。環境に適応出来なかった生物は死んでいく。
「身体を機械に、脳を炭素にしなかった人間は戦火と放射線に焼かれて死んでいった。最終的には脳を炭素化した、ようは君が言うところの倫理に反する人間だけが生き残った。ダーウィンはこれを進化と呼んだが……」
　アキラはじっと私を見た。
「君からしたら進化でもなんでもない……退化ですらないんだろうね。人間という種としての死だ。だが、結局人間を絶滅させたのは環境ではなかった。人間は人間によって絶滅したんだ」
　私はアキラの視線から逃げるように目を背ける。だが、アキラは構わず話を続けた。
「残された人間は私たち三人だけになった。中央管理局というのはね、本来グレインの管理や調整のための施設だ。つまり、今となっては私とレン、ハルのための施設といっても過言ではない。イヴは初めに中央管理局は残留物の探索やグレインの捜索、カイライの製造及び維持管理を行っていると言っていたね。それは間違いではない。だが、そこまで重要な活動でもないんだよ」
「重要な活動ではないって？」
「考えてみればわかることだ。そんなことしてなんになる？　全て我々三人の暇潰しさ。当初の目的を見失ってないのは人工知能であるイヴだけだ。イヴだけは作られた当初の目的を見失わずに我々を生かし続けようとしている。だが、何もせずに地下でじっとしているだけでは精神を壊してしまう。だから、我々は自らの仕事を作ることにした」

アキラは周囲を見回した。
「私は地上を探索することを仕事にすることにした。勿論、それに大きな意味はない。まあ、たまに掘り出し物を発掘することもあるがね。例えば君とか」
そういえば、病院に放置されていた私を拾ってきたのはアキラだったか。
「ハルもハルで必要もないのに新しいカイライを作り続けている。私が外に出るためのカイライを作っているのは彼だが、彼のカイライをテストしているのは私だ。ハルにとっては機械弄りをするのが一番の生き甲斐らしい」
中央管理局は残留物の探索やグレインの捜索、カイライの製造及び維持管理を行っているとイヴは言っていた。残留物の探索はアキラが、カイライの製造はハルが行なっているとして、残っているのは……
「初期化する前の君はグレインの捜索を生き甲斐にしていたよ。私のように取り残された人間がいるんじゃないかと言ってね」
「でもそれならもっと局に人がいるんじゃ……」
「グレイン自体は沢山見つかるんだ。だが、グレインの情報は常に電力が供給されていないと簡単に揮発してしまう。つまり見つかるのはただの炭素の塊であることが多い。君のように記憶の一部を失う方が珍しいんだ」
アキラは地面を指差す。きっと瓦礫の下には多くの死体が埋まっていることだろう。
「君を病院で見つけた時、君はグレインの調整装置に繋がれていた。きっとグレインか、カイライの調整、修理に来ていたんだろうね。長い間瓦礫の下に埋まっていた君は、調整装置に搭載された非常電源によって辛うじてグレイン内のデータが保持されていた。だが、あまりにも放置されていた時間が長すぎたんだろう。君のグレインはその時点で人格や知識のデータ以外が揮発してしまっていたんだ」
つまり私が中央管理局に初めて来た時、今の私と同じような状態だったのだろう。

「じゃあ、私は二回も記憶を失っている？」
「少なくとも私が知る限りではね。私が君を病院で拾ったのが十三年前。つまり君は十三年分の記憶を失った。一日二日ではない、十三年だ。もうすでに誰かに言われているかもしれないが、君は前の君とは別人だ。グレインの捜索はあくまで前の君がやりたかったこと。君は君のやりたいことをやればいい」
　私のやりたいこと。アキラはそう言うが、すぐに思いつくものでもない。私が思い悩んでいると、アキラが苦笑しながら私の肩を叩いた。
「やはりこのカイライはよく出来てる。君が苦悩しているのが表情からよくわかるよ。さて、テストはこれぐらいでいいだろう。局に戻ろう」
　アキラは管理局の入り口がある建物の方向へと歩いていく。私はアキラの後に続きながら赤い空を見上げた。
　青い空を知っている私からしたら、この赤い空は禍々しく感じる。だが、もしこの赤い空しか見たことのない者からしたら、この空は『いつも通りの綺麗な赤い空』なのだ。この世界がおかしいのか、私がおかしいのか。
　この狂気に満ちた世界で、私のやりたいこととは一体なんだ？

　昇降機のある部屋でカイライを換え、私は自室に帰って来ていた。アキラはテストの結果をハルに報告しに行っている。私は改めて自分の部屋にある鍵の掛かった扉の前に立つ。
　アキラは私に自分のやりたいことを見つけろと言った。そのヒントが、この部屋の奥にある気がする。
　私は改めてクローゼットを開け、中に入っているものを確かめる。その時、ハルが言っていた言葉を思い出した。私はクローゼットに掛かっている上着のポケットに手を突っ込む。私の予想通り、そこにはどこにでもありそうな金属製の鍵が入っていた。
「……なんで？」

ハルは『ポケットの中』という単語を初期化する前の私から聞いたと言っていた。だとしたら、初期化する前の私はどうしてそんなことをハルに覚えておいて欲しいと言ったんだろうか。
鍵を失くしたくないだけならもっとわかりやすい場所に仕舞えばいい。鍵を隠すにしても、ハルに頼むのではなく、隠し場所のメモでも持ち歩けばいい話だ。
やはり、この部屋には何かある。私は鍵を手の中で握り直すと、鍵穴に差し込む。そのまま鍵を時計回りに回すと、カタンと小気味良い音がした。
私はドアノブを捻り、中を覗きながら慎重に開ける。部屋の中は薄暗かったが、扉の横の壁を手で探り、明かりをつけた。
「これは……」
部屋の中は作業場のようになっていた。中心には大きな机が置いてあり、上にたくさんの工具や電子部品とともに大きな機械の箱のようなものが置いてあった。
「……ラジカセ？」
沢山のボタンやダイヤルがついた箱の後ろからは何本かケーブルが伸びており、一本は壁にあるコンセントに、一本は地面に置かれた金属製の機械に繋がれていた。
部屋には机のほかにも様々なものが置かれている。棚には誰のものかもわからないグレインが乱雑に並べられており、グレインの中にはひび割れたり変形したりしているものもあった。部屋の隅には椅子に座らされる形でカイライが放置されており、パッと見た限りでは私が今入っているカイライと同じものだろう。
「スペアかな？」
私はカイライをじっと見つめる。抜け殻になっているカイライは驚くほど無機質な表情を浮かべており、不気味さを感じさせた。グレインが入っていないだけでここまで人間に見えないとは。
何にしても、ベッドのある部屋と比べてこの部屋の中には物が多い。逆に言えば、ベッドのある部屋はあくまで寝室で、こっちが私室なんだろう。

私は机の上に置かれた機械の箱の前に戻る。箱の上には一枚の紙が置かれており、手書きでびっしりと文字が書かれていた。

『何も知らない私へ』

最初の一文を読んだ瞬間、私の背中に冷たい感覚が走る。どうやらその紙は手紙のようだった。

私は震える手で手紙を手に取る。誰もいないことは分かっているが、私は無意識的に部屋の扉を閉め、内部から鍵を掛けた。

「これ、もしかして……」

間違いない。これは初期化する前の私から、今の私に向けて書かれた手紙だ。

まさか、私は自分が初期化してしまうことを予見していたとでも言うのだろうか。答えはこの手紙の中にあるのだろう。

私は引き続き手紙を読み進めた。

何も知らない私へ。

荒廃した世界、身体を捨てた人間。何も知らない貴方はこの狂気に満ちた世界を目の当たりにして一体何を思うだろうか。この部屋にたどり着いているということは、一通り管理局の人間と話したということだろう。

この部屋の鍵の隠し場所のヒントをハルに託した。勘のいい私なら、そのヒントのみで十分この部屋の鍵を入手できるはずだ。

事実、貴方はこの手紙を読んでいる。

十三年前、ハルの研究室で目覚め、この世界のことを知った私は絶望した。放射能物質で汚染され、空の色までも変わってしまった自然環境。人間は親から貰った体を捨て、魂を無機物に詰め込んでまで戦争を続けた。

きっとバチが当たったのだろう。

しばらく記憶のないまま中央管理局で過ごしていたが、何かが変わるわけでもない。魂のない機械たちが人間の真似事を行うだけの世界に、意味などあるのだろうか。私はもう、日々を過ごすのに疲れてしまった。

レン、これは悪い夢だ。私は一度、私の原点に帰ろうと思う。
地上に捜索に出た際に初期化されるようグレインに細工を行った。ある意味自殺に近いものがあるが、私の魂を引き継いで新しい人格が生まれるのだとしたら実質子を成したに等しいのかもしれない。
レン、貴方はこの世界を見て何を感じただろうか。私と同じようにこの世界で生きていく気がないのなら、目の前にある機械から出ているコードを首の後ろに接続し、電源を入れるといい。グレインに一瞬で過電圧をかけ、グレイン内の回路を焼き切ることができる。
逆に何かやりたいことがあるのなら、何も見なかったことにして引き続きこの世界で苦しむといい。
レン、貴方はどちらを選ぶ？

手紙を最後まで読み終わった私は、いつのまにか力なく扉の前に座り込んでいた。初期化する前の私は、自分で自分を初期化したのだ。
確かにそれは自殺に近い。そして、初期化したことによって私という人格が生まれた。
初期化する前の私は何故自分のグレインをこの装置で焼き切らなかったのだろう。手紙には子を成すと書いてあったが、何かをこの世界に残してから死にたかったのかもしれない。
「だけど、それは――」
それは、私も同じだ。この世界で生きていく意味をまるで感じない。
ただぼんやりと生き続け、自分が狂っているのかそうでないのかもわからない状態になるぐらいなら、今この瞬間死んだ方がいくらかマシだろう。私は部屋の鍵が掛かっていることを確かめると、機械から伸びているコードを首の後ろに挿し、機械の電源を入れた。
「ごめんなさい、私――さようなら」
機械につけられたモニターが点灯し、起動を始める。
私は目を瞑り、過電圧がグレインを焼き切るのを待った。

『ＧＢ．ＪＰＳＤＪ７４５３９―ＲＥＮのコピーが完了しました』

そう機械音声が流れ、私は慌てて目を開ける。

次の瞬間、激しい閃光とともに私は意識を手放した。

# 思考する機械

気がつくと、私はただぼんやりと部屋の中を眺めていた。目の前には大きな机があり、その上には先程私のグレインを焼き切った機械の箱と、頭から煙を立ち昇らせている人型のカイライがある。その様子を見るに、どうやら機械は正常に作動し、私のグレインを焼いたようだ。

……だとしたら、今の私は一体なんだ？

非科学的なことではあるが、死んだことによって霊体になり、グレインという容れ物から解き放たれたのだろうか。所謂幽霊という存在になったのかと思ったが、もしそうなのだとしたら、あまりにも動けなさすぎる。今の私は自分の意思で動かせる体の部位が一つもなく、ただ一点を見つめることしかできなかった。

「はぁ、なるほど。これは結構興味深い結果になりましたね」

唐突に部屋の中に声が響き渡る。その声は聞き馴染みがあるわけではないが、確実に聞いたことのある声だった。

この声は、私が入っていたカイライの声だ。

私は機械の前で白い煙を上げている人型のカイライを見る。口は力なく半開きになっており、動いた様子はない。

「本当に自壊するとは……おもしろ」

また声が聞こえる。やはり目の前のカイライは動いていない。

だとしたら、音源はどこだ？

「さーて、正常にコピーできてるといいけど。もしもーし、聞こえますかー？」

視界の隅で何かが動いた。私は咄嗟にその何かに意識を向ける。

それは、部屋の隅に座らされていたスペアのカイライだった。目の前にある私が先程まで入っていた人型のカイライと寸分違わぬ見た目をしたカイライは大きく伸びをすると、白い煙を上げているカイライからグレインを取り出す。

「あー、カイライの中に入れたまま焼くとこんな感じになるんだ。あとでカイライはクリーニングしなきゃ……って、ちゃんとコピー取れ

てるよね？」
　目の前で動いているカイライは、焼かれたグラインを机の上に置くと、私の方へと近づいてくる。煙が上がっているグレインには『ＧＢ・ＪＰＳＤＪ７４５３９―ＲＥＮ』と表記がなされていた。
「もしもーし、聞こえてますかー？」
　目の前のカイライは私の視界を覗き込む。どうやら目の前のこのカイライは私に話しかけているらしい。
『貴方は……いったい誰なの？』
　私が声を発すると、普段よく聞く機械音声となって部屋に響く。目の前のカイライは私の声を聞くと嬉しそうに笑った。
「私ですか？　私は貴方です。貴方にわかりやすく言うならば、『初期化される前の私』ですよ」
『初期化される前の……私？』
　いや、そんなはずはない。初期化された結果私がいるのだとしたら、初期化される前の私が残っているはずがない。
「まあ便宜上、そう説明するのがわかりやすいというだけだけどね。私はこの通り、初期化されてないわけですし」
　状況が飲み込めない。初期化される前の私が、今私の目の前にいた。
「まあ呼び名がないと話がしにくいと思いますし、私のことはジュウモンジとでも呼んでくれたら大丈夫です。十文字恋、それが私の名前ですので」
　十文字と名乗った女性はもう煙が出なくなったグレインを手に取り弄り始めた。
「ほらこれ、よくできてるでしょう？　拾ってきたグレインの中から一番状態のよかったものを加工して作ったんですよ？」
『それは……私のグレイン……』
「ええ、そうですよ。貴方が入っていたグレインです。もっとも、中に入っていた人格は先程死にましたが」
『中の人格は死んだ？　でも、私は今実際――』
「実際ここにいるって？　……んふ。主観というものは本当に面白

い」
　十文字は部屋の隅から先程まで座っていた椅子をこちらに持ってきて、私の前に腰かける。
「まず、こちらから質問をしましょう。貴方は、どうして死を選んだんですか？」
『どうしてって……手紙に書いてあった通りです。この世界で生きていくことに価値を見出せなかったから、私は死を選んだ』
「じゃあ、もしこの部屋を見つけていなかったら。もしこのまま日々を過ぎていたら自殺していたと思いますか？」
　その場合はどうだろうか。この部屋に入らなかったら、手紙を読まなかったら、グレインを焼く機械がなかったら、私は自殺をしていなかったかもしれない。
「その様子だと、自殺はしなかったでしょうね。ただ流されるまま日々を送っていた。違いますか？」
　十文字はクリップボードを取り出し、ペンを走らせ始める。
「でも手紙に書いてあった通りということは、あの手紙の内容に同調したということ。やはりこの世界は狂ったおかしな世界に見えるんでしょうねー。実際どう思います？」
　十文字と目が合う。
『どう思うも何も……これはどういうことなんですか？　貴方は……私は……私は今……そもそも私は……』
「混乱してますねー。落ち着かせるためにも説明から始めないとダメか」
　十文字はクリップボードを机の上に置いて、私に向き直った。
「どこから話すのがいいんでしょう……まあ、ことの発端は戦時中ですね。病院の精神科医として働いていた私はグレインの点検中に衛星兵器からの攻撃で瓦礫に埋もれ、一時的に仮死状態になってしまったんですよ」
『そして、貴方はアキラに拾われた……』
「はいそうです。いやぁ幸運でした。戦争が全て終わってから拾われるなんて。考えてもみてくださいよ。九十億分の三ですよ？　宝く

じなんてめじゃない確率ですよ！　私は瓦礫に埋まっていたことによってこの人類史上最悪で最後の戦争を生き延びたんです」
『でも、貴方の記憶は初期化してしまっていて――』
「嘘に決まってるじゃないですか。記憶がないフリをしていた方が色々やりやすいこともあるんです。みんな優しくしてくれますし」
　十文字は、拾われてからの十三年間、記憶喪失のフリをして今まで生活していたのだろう。
「そんなことはどうでもいいんです。なんにしてもこの世界は素晴らしい世界になっていた。もうこの世界の法律は機能していない。どんな非人道的な実験をしても、咎めるものはいないんです。口うるさい上司も、監査に来る委員会もない。レン、貴方はね、私の成果物の一つなんです」
『私が……成果物？』
「そうですよぉ？　思考実験の一つです。人の意識はどのタイミングで発生するのか。人間の主観的感覚や意識、感覚質は私が生身である時からの研究テーマです。それこそ、その分野に関してはあの男よりも私のほうが詳しい。ハルはあくまでハードウェアの専門家。ハルはソフトウェアをそのままにハードウェアである脳の構成部品を入れ替えることによって人間を機械化したみたいですけど、私はソフトウェアそのものを移動させる研究をしたかった」
　コツコツと十文字はカメラのレンズを突く。
「だから取り敢えず私のグレイン内の情報を死んだ他人のグレインに移したりとか、死んだグレインから意識というものが取り出せるかという研究をしていたんですが……やっぱりうまくいきませんね。意識というものは客観的には観測できない。それがネックになってあまり研究は思ったように進まないんです。目の前の箱が見えますか？　この箱です。この箱」
　十文字は机の上にある機械を手で撫でた。
「この箱はですね、簡単に言えば性能のいいただのスタンドアローンなコンピュータに、カメラとマイク、スピーカーをつけただけのものです。グレイン内にある情報をコピーして貼り付けるとその人間の

コピーが出来上がる。まあ、あくまで喋れるだけの存在ですけど。まさに今の貴方です」
『じゃあ、今の私は――』
「はい。今目の前にあるグレインからコピーされたデータでしかありません。どうです？　感覚質ありますか？　まあ、あってもなくてもこっちからは確認できないんですが」
そう言って十文字は笑うが、こっちとしては笑いごとではない。つまり、今ここにいる私は、もうすでに人間ではない。
いや、私はそもそも人間だったのか？
「なんにしても、研究の一環として拾ってきたグレインの外装を私のグレインと瓜二つにして、私の人格データのみをグレインに移したんです。凄くないですか？　丸ごとではなく人格のみをグレインにコピーすることができたんです！　何回かテストをして問題が無さそうだったので作業用のカイライに詰めて地上に放置しました。そこから先は、貴方が見てきた通りです」
『つまり、私は……』
「ええ、私の人格データのコピーですよ。いや、正しくはコピーのコピーか。貴方のコピー元であるレンは、私の思惑通りに中央管理局にたどり着き、局の人間と会話をした。その結果、現状に絶望感を抱き自らを破壊した。貴方はレンのグレインが破壊される０．０２秒前に取られたコピーです。つまり、貴方という存在は、五分間に発生したんですよ。例え貴方の中にここ数日の記憶があるとしても、それは貴方が実際に経験したことではない。貴方はただ、データとしてレンの記憶を持っているだけです。どうです？　現状を理解できましたか？」
『一体何が目的でそんなことを――』
「目的？　先程話したじゃないですか。私は人間のソフトウェアを解明したい。ハードウェアの方は殆どハルによって解明されましたが、ソフトウェアは謎のままです。意識とは、感覚質とは何なのか。アキラに言われたでしょう？　君は君のやりたいことをやればいいと。私がやりたいのはそれです」

アキラは初期化する前の私はグレインの捜索を生きがいにしていると言っていた。それは、あくまでグレイン集めの口実でしかなかったのだ。十文字は研究の材料を、被検体を集めるために地上に出ていた。グレインの捜索をしていると言えば、確かにグレインを持って帰ってきても違和感はない。

「実験の着想を得たのはハルが公表した実験データでしたねー。自分をコピーしてカイライに詰め、それに自分自身を手術させる……まさしく天才的であり、狂気的な発想ですよ」

ハルのコピーは実験が終わった後に処分されたと言っていた。だが、本人の意思が強くなければ処分などできないはずだ。私自身がそのような状態なので分かるが、コピー先にコピー先であるという自覚はまるでない。

「まあ何にしても、今回の実験はそこそこ価値がありました。新しく生まれた人格が、現状を判断して最終的に自壊を選ぶ。素晴らしいですねー。貴方はこの数日間何度も自問自答したんでしょうね。私は何者なんだと」

『そう、私は何度も自答した。自分は何者なのか。私は人間なのか』

「はい。結果としては人間ではありません。人間によく似た思考機械です」

私は自分のことを人間だと思っていた。人間だからこそ感情や意識というものがあり、感覚というものがあるのだと思っていた。

だが、それは違った。

私は確かに今、主観的な意識を感じている。

無機物にも、人工物にも魂は宿るのだ。

「さて、それじゃあ最後の質問をしましょうか。レン、ここまで色々と経験し、話を聞いた貴方に聞きます」

十文字は椅子から立ち上がると私のほうに近づいてくる。そして私の視覚を担っているカメラを覗き込んだ。

「今どんな気持ちですか？」

『……虚しい』
スピーカーから無機質な機械音声が流れる。目の前の十文字はその答えを聞いて満足そうに頷いた。
「はい、お疲れ様でした。実験は終了です。貴方の記憶データはハードディスクに保存されます。思考の連続性を失った瞬間、貴方は死にますが、保存されたデータはこの先の人類の発展に貢献します」
『待って！　私はまだ――』
十文字は鼻歌混じりに机の上に置かれた機械に手を伸ばす。
「大丈夫大丈夫。私から見たら起動するたびに生き返りますから。まあ電源落とすたびに貴方は死ぬでしょうけど」
十文字は笑いながら機械の電源をおｔ

「さて、次はどんな実験をしましょうか」
十文字は大きく伸びをすると、鍵を開け、部屋を出て行く。
明かりの消された部屋には過電圧によって焼かれたグレインと、先程まで意思を持って話していた機械が机の上に取り残された。